

郷土資料 昭和五十二年九月十八日

第八十一回 史跡めぐり資料

旧七左衛門村ほか

越谷市郷土研究会

副会長 石塚吉男

案内

一、日時

九月十八日 午前九時十五分

越岩駅前集合 午前九時三十分

越巻行バス出発 帰着午後五時

の予定

一、場所

市内七左町八田七左衛門村

観照院、兵主大明神、その他

一、会費

^概八百円 昼食各自持参

資料

一、七左衛門村 持津新田 七左衛門村は騎西庄
と云、当村は寛永の頃にせ、神明下村の里
正七左衛門新墾す。正保の国図には新田槐
戸村と載せ、元禄の改には今の村名にある
り、家數百十四、東は登戸村、南は大間野
村、西は越巻村、北は谷中村なり、東西大
町半、南北二十五町許、世人越々谷糯とて
上品とするは当所の産を云、開榮の後よ
り市料所なり、が、元禄十三年平岡主殿。

曾我七兵衛・長山弥三郎・菅右某・中条某
に賜ひ、其の餘は御料所にて今子孫平岡岩見
守・曾我豊後守・長山弥三郎・菅右平八郎
・中条鉄太郎等が采地及び御料所なり、用
水（末田村溜井）江戸よりの里數（六里余
）横地の年代（元祿八年酒井河内守）は前
村（四町野村）に同じ、又後年新開の地あり、
享保十八年三月寛播磨守亂し、安永八
年十二月伊原半左衛門改め、共に御料所に
して持添の地なり、

高札場三ヶ所

十名 上組 四谷 前谷 根郷 中組

下組

古綾瀬川 村の西を流る、川中八間許り、

新綾瀬川 村の西界にて川巾十ニ間許、い

つ頃にや、此川を通じてニ糸可

りしより、新古の名あり、今比

流と足立郡の界とす、何れも川

添ひに水除の堤を設く、

稻荷社 村の鎮守とす、眞福寺の持なり

下に同じ、

天神社

山王社

觀照院の持

荒神社

村民持、下同じ

稻荷社六宇

觀照院

新義真言宗、末田村金剛院末、日

映山と号す、開山尊慶又僧省弁承

應三年中興せり、開基は当村に開

怨せし、今田七左衛門にて、其法名

日映觀照と云す、以下、山号寺号と

す、本尊は弥陀を安す、鐘樓 明

和三年鑄造の鐘をかゝ、稻荷社

此末社として天神・疱瘡神の二社

を置、観音堂

持福院 観照院門徒、日照山と号す、本尊

弥陀を安す、

兵主大沼大明神 崇神詳ならず、

真福寺 同門徒、実相山と号す、本尊前に

同じ、

(新編武蔵風土記稿)

二 觀 照 院 越谷市七左町ニセ入

「新編武蔵風土記稿」によれば（前掲参
照）

とあり、寺伝によると当寺は寛永年間に
会田七左衛門が創建し、当時は天台宗であ
り、延宝六年（一六七八）に秀尊上人が真
言宗に改宗したと伝えている。また当寺の
山門は越谷御殿（將軍鷹狩りの際休泊所）
の門を移築したものとわれている。

「呂質」 寄木造・玉眼・漆箔

「法量」 像高 九〇・五 頭頂ノ頸

一九・〇 鬚際ノ頸 一一・〇

耳張 一二・〇 面張 一〇・八

臂張 三三・〇 膝張 四三・〇

面奥 一九・五 腹奥 一九・五

膝奥 三三・五 裾奥 四一・〇

本寺の本尊である。壇上厨子に入れら

れてゐる。上品下生の末迦印を結ぶ通形の

阿彌陀像である。全体にふつくらしさを盛り

上りを見せている。衲衣の衣文線は割にす
るどく彫られ金箔も落着いている。光背、
台坐の痛みはひどいが、本体はしつかりし
ている。底板も本体に密着している。

《》 木造大日如來坐像

「品質」 寄木造・玉眼・彩色

「法量」 像高 二一・〇 頭頂ノ頸

四・二 耳張 四・九 面張 四・

二 臂張 一三・五 膝張 面奥

・五

智拳印を結んだ通形の金剛界大日如來で
ある。衣文線など全体に彫りは浅く甘い
、金泥にて描かれた衣文の文様は極めて良
く残っている（特に背面）。五三を引き胸
を張った姿は極めて姿勢の良い像と感
じさせる。

銅製宝冠及び台座、厨子などは共に江戸時
代造立当利。心々と思われ。本尊と同様

厨子、台座はかなり痛んでいるが本尊は保存良好である。但し右眼を失っているのは残念である。

43 木造不動明王坐像

「品質」 寄木造・玉眼・彩色

「法量」 像高 二九・〇 耳張 七

・ 二 面奥 八・八 膝張 二四・〇

裾奥 二二・二

右手に空剣、左手に鬚索を持ち忿怒形で

岩座に坐す像である。全身漆黒に変色して
いるが、頂蓮の頭頂にある蓮花の冠は金
泥が塗られ、胸飾も金泥で描かれている。
三道の部分にも朱で三本の筋が引かれ、歯
は白、胡粉が塗られている。これらは後で
描き加えられたものと思われる。全体に（光
背までも含めて）迫力に欠け堅く様式化し
てしまっているが、反面、江戸時代に於け
る地方仏師の苦惱の程がうかがわれる様
な出来栄である。

445

木造 会田七左衛門夫妻坐像

「品質」 寄木造・玉眼・彩色

「法量」 八七左衛門像のみ

像高 六〇・〇 耳張 一七・〇

面張 一三・五 面奥 一八・五

臂張 四四・六 裾張 六二・〇

裾奥 五〇・〇

当時開基会田七左衛門夫妻の像である。

田頂、道服姿で、夫は指を組み、妻は指を

伸ばして共に合掌している。全体に彫りは
浅く、抑揚がないが絵画作品を見るような
落着きを持った像である。妻女像は一まわ
り小さく造られており、共に台座に置かれ
ている、面貌はかなり个性的なことから、
歿後間もなく、夫妻の徳を追慕して造立さ
れたものであろう。開基の像が残るのは珍
しく、越谷市内では本像のみであらうと思
われる。下略

(越谷市仙像調査報告書)

三 兵 神 社 (兵主大沼大明神)

西部に七左衛門部落がある。この部落は、昔、七左衛門村、すなわち騎西庄といふ、当時、寛永の頃、神明下村の里正七左衛門が新墾したと記録にある。(今より約三百四十年ほど前にある)。この部落に石の鳥居とともう隣に大沼大明神と彫られた社があり、人々は明神様、すなわち兵神社のもの、のふ

神社」とかいっている。毎年三月一日と十

月一日には盛大な祭をやる。この社の神は
戦ついくさしの神であるという。今から五
十年はかり前の日露戦争の最中にこの社よ
り不意に何千何百の鳩が飛びさう部落出身
の方々を守つたとも云われている。この社
は嘉永二年(千八百五十年)今から百十年
ばかり前の作りの石碑があるだけ、他は不明
であるが、古老の話だと今から四百年ほど
前のこと、当時の奥羽地乙南部は大きな沼
で後に開墾された。在衛門新田で生まれ

ていずのつ石時代、扇ヶ谷上杉定正、至て
あつ三太田道灌が畠山城を築くために部下
の兵士に筑城に必要な資材を舟で運搬させ
た。ある秋、台風シーズンこの時であつた。

ようやくにして畠山を目前にしたお羽地区
、現在の沼組のところが来た時、嵐のゆ
る身か難船し、兵士ともども深く沈んでし
まつた。この霊をなごめたるため後年新田
用英が進み沼部落が出来、残骸のあつたと

ある。
えうとなく
兵神社とえう
まうになつた
ので

(越谷市の史蹟と伝説)

四戸塚城

三沼領 戸塚村

戸塚村は東西十一町余、南北廿町許、東は綾瀬川を隔て埼玉郡腰巻村にして、西は北原村の飛地宇行衛に接し、南は長蔵新田・立野村等に境ひ、北は大門宿に隣れり、家数百八十村の西の方に日光御成街道つらぬり、其中程に一里塚あり、これ江戸より六里に及べり（下略）